

〈研究ノート〉

滞日外国人児童が日本で生活するための支援

——キャリア支援を中心に——

柿木 志津江*, 寶田 玲子*, 木村 志保**

Issues of Immigrant Children Living in Japan :
Promoting Their Career Development

Shizue Kakigi, Reiko Hoda and Shiho Kimura

要約：滞日外国人の増加に伴い、彼らが日本で生活をする上での課題も多様化してきているが、その中には教育問題や家族問題等、児童を取り巻く課題も含まれる。本研究では、滞日外国人児童の教育問題に焦点をあて、中でも、滞日外国人児童を直接支援する滞日外国人支援者を対象としたインタビュー結果から明らかになったキャリア支援の必要性について述べる。さらに、支援者の要望に基づき、筆者が実施したキャリア支援の取り組みについて報告するとともに、今後の課題について検討する。

Abstract : As the number of immigrants increases, the problems they face vary from one case to another, encompassing issues relating to children such as family and education. This study focuses on educational issues facing immigrant children in Japan. We introduce the career development program distributed to immigrant children and discuss the significance of its promotion.

Key words : 滞日外国人児童 Immigrant children 教育問題 educational issues キャリア支援 career development

はじめに

外務省によると、在留外国人数は近年増加傾向にある¹⁾。今後、「日本人の配偶者等」「定住者」等の在留資格をもつ外国人の定着化が進むことや、増加傾向にある就労資格による新規入国者や在留外国人について、将来的に「永住者」の在留資格を取得し在留を希望する外国人が増加することが見込まれている²⁾。

筆者が滞日外国人支援団体・機関を対象に行ったアンケート調査において、これらの組織が滞日外国人を支援する上でさまざまな課題を抱えていることが明らかとなった³⁾。その中には教育問題や家族問題への対応に関することも含まれ、滞日外国人児童が困難に直面している現状が示唆される。

そこで、滞日外国人児童を対象とした研究を概観したところ、教育をテーマとしたものが多くみられた。例え

ば、保育・教育に関する研究^{4,5)}、不就学に関する研究⁶⁻⁸⁾、日本語指導に関する研究⁹⁾、障害のある児童の教育上の問題に関する研究^{10,11)}、進路・進学の問題に関する研究^{12,13)}等がある。

それでは滞日外国人児童への教育として、日本ではどのような施策がとられているかをみていきたい。文部科学省によると、帰国児童生徒や外国人児童生徒への教育については表1に示すような施策が行われている。表1をみると、外国人児童への教育は日本語指導が重視されていることがわかる。

以上述べてきたように、滞日外国人児童に関する研究では教育が多く取り上げられ、学校現場においては日本語指導が重視されている現状が把握できた。日本語指導が重視される背景には、日本語指導を要する外国人児童数やこのような児童が在籍する学校数が増加傾向にあることがあげられる¹⁵⁾。児童という年齢上の特性からする

受付日 2017. 5. 26 / 掲載決定日 2017. 11. 10

*関西福祉科学大学 社会福祉学部 准教授

**関西福祉科学大学 心理科学部 准教授

表 1 帰国・外国人児童への教育等に関する施策

施策	内容
日本語指導等、特別な配慮を要する児童生徒に対応した教員の配置	1992 年度から、「外国人児童生徒・帰国児童生徒」の日本語指導等に対応した教員定数の特例加算により、その給与費等を国庫負担。
「帰国・外国人児童生徒教育担当指導主事等連絡協議会」の開催	2001 年度から、帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域のセンター校の担当者、都道府県・市町村教育委員会の指導主事、その他帰国・外国人児童生徒教育担当者等を対象に、各地域における施策の実施状況や先進的な取組等についての情報交換を行うとともに、直面する課題やその対応方策等についての研究協議を行う会議を開催。
「外国人児童生徒等に対する日本語指導のための指導者の養成を目的とした研修」の実施	1993 年度から、外国人児童生徒受入校の教員、教育委員会の外国人児童生徒教育担当の指導主事等を対象とし、2003 年度からは、校長・教頭等の管理職も対象に加え、外国人児童生徒に対する日本語指導等の専門的な研修を行い、指導力の向上を図る「外国人児童生徒等に対する日本語指導指導者養成研修」を実施。
「学校教育における JSL カリキュラム」の開発	2001 年度から、日本語指導が必要な外国人児童生徒を学校生活に速やかに適応させるために、日本語の初期指導から教科指導につながる段階の「JSL (Japanese as a Second Language の略、つまり第二言語としての日本語のこと) カリキュラム」を開発。

文部科学省ホームページ¹⁴⁾を参考に筆者作成

と、研究テーマが教育に集中することは妥当なことであり、教育現場ではそこで用いられる言葉の理解が必要であることも理解できる。しかし、児童が中学校や高校を卒業後、日本で生活するにしても帰国するにしても、社会の中で自立した人間として生きていくことが求められることを踏まえると、「教育の対象者」として捉えるのみならず、「生活者」として捉える必要性があるのではないだろうかと考えた。

このような問題意識のもと、本研究では滞日外国人児童を直接支援する滞日外国人支援者へインタビューを行い、滞日外国人児童がどのように将来の進路を選択するのかをはじめ、その生活の現状を把握するとともに、滞日外国人支援者のインタビュー結果から明らかになったキャリア支援の必要性について述べる。さらに、支援者の要望に基づき、筆者が実施したキャリア支援の取り組みについて報告するとともに、今後の課題について検討する。

なお、本研究における「児童」とは、児童福祉法上の定義にならい 18 歳未満の子どもとする。そのため「児童」「生徒」と区別はしていない。また、「キャリア教育」ではなく「キャリア支援」という言葉を用いているが、筆者が教育学の立場からこの問題を論じるわけではないからである。もちろん、教育問題やキャリア支援を考える上で教育の現場での取り組みについて触れないわけにはいかない。しかし、筆者は教育において行われる進路や職業に関する指導に留まらず、滞日外国人児童が地域社会の中で生活していくために必要な、進路や職業選択および自己実現にむけたサポートを含めることがキャリア支援であると考え。滞日外国人児童が地域や社会の一員として包摂されながら、自分の人生を選択し、生きていくためにどのような支援が必要かを考えるソーシャルワークの視座から論じていく。

なお、本研究は関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を得て実施しており、滞日外国人支援者を対象としたインタビュー調査においては、研究協力は任意であること、得られたデータは研究以外では使用しないこと、個人が特定できる情報は公表しないこと等を口頭および書面にて説明し、同意が得られた後に実施した。

I 滞日外国人支援者へのインタビュー調査を通して把握した滞日外国人児童の教育問題および支援実践

(1) インタビュー調査の対象と方法

では、滞日外国人児童に対して実際に行われている教育支援が、滞日外国人の視点から見てどのように捉えられているのだろうか。また、滞日外国人当事者が望む教育支援とは具体的にどのようなものなのか。ここでは、南米日系人を中心とした滞日外国人を支援する事業および活動を行っている C 支援団体の代表 A 氏と、小・中学校において外国人児童の支援を行っている生活支援員 B 氏にインタビューを行い、インタビュー結果から明らかとなった滞日外国人児童に関わる教育問題について整理した。調査期間は 2016 年 8 月から 2017 年 3 月で、一回のインタビュー調査に所要した時間は 2 時間とし、半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は、日本で生活するにあたって滞日外国人が抱える問題に具体的にどのようなものがあるのか、また滞日外国人児童への支援活動を行う上で、どのような取り組みが必要だと思えるのかを中心に、以下の 1)~4) について聞き取りを行った。1) 団体・機関が抱える課題・問題点、2) 滞日外国人が直面する(抱える)問題、3) 制度・サービス面における課題、4) 対応困難および問題解決を実現したケースについてである。インタビュー内容は IC レコーダーに記録後、テープ起こしを行った。その後、回答を読み返しながらか、反復して出現する言語から現象のパ

ターンを発見し、現象のパターンを概念レベルで把握するために、パターンに名称をつけてラベリングを行った。

両氏を調査対象に選定したのは、いくつかの共通点があったためである。その一つは、両氏とも滞日外国人であり、かつ当事者でもあることである。これまで滞日外国人への支援は、その多くが日本人によるものであった。もう一つは、両氏とも自身の体験から滞日外国人の子どもたちを支援したいという思いを抱き、ボランティア活動に加わったことで、現在の活動支援に結びついていった経緯があることである。

(2) A 氏および B 氏の活動内容について

滞日外国人の A 氏が代表を務める C 支援団体の事業および活動は、1) 南米日系人を中心とした在住外国人の支援事業、2) 在日外国人同士の交流と相互援助事業、3) 在留外国人と地域住民との交流事業、4) 移民の歴史の保存・紹介、5) アミーゴの会の運営を柱とする。具体的には、「プロジェクト・かえる」（日本からブラジルへの帰国者のサポート）、小～高校生までを対象とした語学教室（毎週土曜日）、スポーツ大会や交流イベントの開催、相談対応、移動領事館の開催（ビザの手続き、生活相談等）等である。これらの事業や活動を通じて明らかになった、滞日ブラジル人の生活状況や彼らが抱える生活問題は、医療問題（医療通訳、メンタルヘルス）、福祉問題（障害児・者、高齢・障害年金、健康保険）、教育問題（性教育、いじめ、未就学、進学・進路に関する情報不足、キャリア支援の必要性、アイデンティティの形成の必要性）、生活問題（多文化交流の不足、在留資格）等である。

小・中学校において滞日外国人児童の支援を行っている B 氏は、滞日外国人が集住する Z 市の公立学校で、外国人児童生活支援員として児童およびその家族への支援を行っている。B 氏自身も、日本で生活する滞日外国人である。B 氏の生活支援員としての主な業務は、滞日外国人児童やその家族に対して日本での教育支援が円滑に行えるよう、ポルトガル語やスペイン語、英語による通訳、翻訳業務だが、実際の活動は、日本語が不自由な児童に対して、母語と日本語の両方を使って日本語の授業を行ったり、ポルトガル語の母語教育を行ったり、家族や児童の生活相談にも応じたりして多岐にわたる活動を行っている。

(3) インタビュー結果と考察

C 支援団体では、児童のアイデンティティ形成に関してブラジル民話を紹介し、また、C 支援団体が実施する

ポルトガル語教室においてもこの民話を活用し児童に関心をもってもらうよう働きかけをしている。また、「勉強としてではなく、友だちと出会うような感覚で人と交流できる機会をつくる」ことが重要であるとし、スポーツ大会や季節の行事等を実施している。さらに、進学・就職に関するキャリア支援に関しても、C 支援団体ではブラジル人児童に対するさまざまな取り組みを始めている。例えば、大学や専門学校と連携をとり、各教育機関の専門学部（看護、商業、福祉分野他）の紹介や模擬授業を実施する機会、大学や専門学校を見学する機会、卒業後の進路・職業選択について学ぶ機会等をつくっている。また、日本に滞在するブラジル人留学生に来てもらいその研究内容の話聞く機会もつくっている。ブラジル人児童にとって、勉強し活躍するブラジル人の存在がよいモデルとなり、職業や進路選択に対する意識・意欲をもつきっかけとなることが期待される取り組みである。最近では日本の高校へ進学し卒業後就職するブラジル人児童が増えてきている。しかし、大学に進学する児童は全国的にみるとまだまだ少ない状況であるとのことである。高校へ進学するための補助金制度もあるが、保護者の収入により制限される（受給できない）ケースもある。C 支援団体が関わる児童が通う中学・高校のなかには、外国人児童の学習を支援する体制が整えられている学校もある（日本語や教科の指導支援）。A 氏によると、これらの取り組みは、さまざまな側面からブラジル人児童の成長や人生（生活）を見据えた、教育サポートやアイデンティティの形成支援、将来のよりよい進路・職業選択にむけた貴重な支援実践例であり、もっと充実させる必要があると考えられている。

A 氏のインタビュー内容から、滞日外国人児童に関わる教育・生活問題を整理すると、表 2 のようになる。

次に、活動内容の一つである母語教室について B 氏は、日本で生まれ育ち母国のことを知らない児童が多いことから、もう一つの祖国であるブラジルの言葉（ポルトガル語）を理解することで、自身のアイデンティティを確立することを目的としており、したがって、母語教育は日本語教育と同様に重要であると指摘している。また、B 氏は自身の活動目的を「社会人を育てるのが目標で、そこには日本人とか外国人の社会人ではない」とコメントしており、社会の中で児童を大事に育てる意識を持たないと、問題は日本社会全体に跳ね返ってくると懸念を表している。そのためにも、児童が社会人として、地域で生きていくためのキャリア支援が求められていると考えている。

B 氏のインタビュー内容から、滞日外国人児童に関わる教育・生活問題を整理すると、表 3 のようになる。

表 2 C 支援団体・代表 A 氏に対する調査結果 (抜粋)

ラベリング項目	インタビュー内容
1. 児童のアイデンティティ形成の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・日本にいるから日本に染まって収まるのではなく、日本で暮らしながらブラジル人だという自信をもつことが必要である。 ・母語教育の必要性・・・日本語教育とともに、母語教育も重要である。 ・アイデンティティを知って自信をもつためには、母語教室や親が子どもたちに母国の文化を伝えること、子どもも文化の違いを知ることが大切である。
2. 進学・就職に関するキャリア支援の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・高校や大学進学について、児童だけではなく親も準備することが必要である (私立と公立の違い、専願や併願等のシステム、進学後の手続き等)。 ・進路・職業に対する児童の意識・・・「大学」の印象として、ポルトガル語・英語・多文化共生など言語を勉強するというイメージが強い (C 支援団体が関わる児童・生徒)。将来の夢やどのような職業があるのかなど、イメージを持っていない児童が多い。 ・進路・職業に対する親の意識・・・親は子どもの進路について真剣に考えていないケースも多いのではないかと。今の生活が楽しければよいと考えている人が多い。 ・日本の社会では、外国の子どもたちに大学に進学してその後どうするか、どのような選択ができるかということを学べる機会を与えてこなかった。
3. 学校生活において児童 (もしくは親) が抱える悩みや問題 (学習面、対人関係面)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校で対人関係面がうまくいかないケース、いじめの対象となるケースもある。 ・ブラジル人児童に自閉症の疑いがある場合等、保護者が認めないケースもある。ある事例では学校側から特別支援学級に入りサポートを受けるよう勧めがあったが、保護者が普通の教室に入れてほしいという希望を持っていた。 ・自閉症の疑いがある子どもに対し、勉強を教えるときに書かせても理解できないため、物や形で見せたり、絵を見せて説明するなど理解できるよう工夫している。
4. 児童に対する性教育の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・年に 1 回、ブラジルから HIV の当事者が来て、C 支援団体を利用する児童・生徒に対し、HIV の知識や現状、性教育 (中学生たちにコンドームの使い方を教える等) について講義を行う機会を持っている。
5. 外国人児童と日本人児童に対する多文化共生に向けた意識付けの必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・国や文部科学省などが外国人児童に対する教育支援施策を考えることはたいへん重要であり、外国にルーツをもった若者たちが日本で育つことで、将来日本に対して役に立つはずである。 ・日本人の学生に対しても、他の国の人たちとの交流の機会を作り、多文化共生の意義を理解してもらう必要がある。

表 3 Z 市外国人児童生徒支援員 B 氏に対する調査結果 (抜粋)

ラベリング項目	インタビュー内容
1. アイデンティティ形成の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・母語教育の必要性・・・日本語教育とともに、母語教育も重要である。 ・母語教室では、日本で生まれ育ち母国のことを知らない子どもたちが多くことから、もう一つの祖国である言葉を理解することで、自身のアイデンティティを確立する
2. キャリア支援の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・日本語は大きな武器で日本語ができないと限られた仕事しかできない。 ・子どもを大事に育てると、それは日本社会全体に返ってくる。そして日本を支えてくれる。 ・社会人を育てることが目標であり、そこには日本人の、外国人の社会人などない。
3. 日本の教育システムの変革	<ul style="list-style-type: none"> ・外国人を受け入れる政策を進めるなら、外国人の子どもたちの義務教育をシステム化することが大切。 ・子どもたちを受け入れて義務教育を受けさせて、ノウハウをクリアして育てないと深刻な社会問題となる。 ・ノウハウを知らず、そのまま育った子どもたちが、未成年で一人親世帯となるケースが増えている。
4. 送出国と受入国の事前準備	<ul style="list-style-type: none"> ・送出国と受入国 (この場合、日本) が、滞日外国人が来日する前に、日本での生活、日本語、教育システムなど事前に情報提供すべきである。 ・滞日外国人も同様に、十分情報を収集したうえで、何をしに来日するのかを意識して準備することが大切。
5. 生活課題への対応・人材の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・DV、虐待、暴力、非行、メンタルヘルス、障害など生活に関連する問題が多い。 ・これらの生活課題をボランティアなどに頼っているケースがほとんど。 ・通訳・翻訳業務だけでなく、「人のサポートができる人」を育てる必要がある。 ・人材の育成と問題に対応していくための予算も重要である。

滞日外国人を支援する人びとの多くが、当事者でありながら支援者でもあることがフィールドでの調査を通じて明らかになった。そこには、当事者たちだけでなく、地域や行政など、既存のシステムに直接働きかけていくためのアクションをどのようにとるべきか、ともに考えていくことが重要である。支援者であり、当事者でもある人びととの対話を通して、筆者から何かできることはないかと申し入れを行ったところ、キャリア支援に関す

るワークショップを開催し、子どもたちに、職業選択の幅を広げてもらい、その実現のためにどのように取り組んでいくべきか、考える機会を与えて欲しいという要望が出た。そこで、今回、フィールドでのインタビュー内容から明らかにされたキャリア支援プログラムの実施について、主にブラジル人を中心とする滞日外国人児童にワークショップ行うこととした。

II 滞日外国人児童を対象とした キャリア支援の実践報告

(1) プログラムの概要と目的

筆者らは2016年11月に滞日外国人支援団体のポルトガル語教室受講児童を対象としたキャリア支援プログラムを実施した。参加者は小学生19名、中学生5名であった。また、児童らの保護者(13名)も一緒に参加した。表2に示すA氏へのインタビューで語られた、「将来の夢やどのような職業があるのかなど、イメージを持っていない児童が多い」ということを踏まえ、プログラムを検討した。具体的には内容は、①福祉の仕事の紹介、②将来の進路・仕事について考える、③WOOP(Wish-Outcome-Obstacle-Plan、以下、WOOP)(夢をかなえる実行計画)の記入とし、時間は約60分(講義40分、WOOPシート記入20分)の構成とした。実施したプログラムの手順を表4に示す。

今回は、筆者の専門領域が福祉であったことから、仕事の例として福祉の仕事、特にソーシャルワーカーについて、児童および保護者に説明を行った。また、その後、参加児童にWOOPシート(図1)を配布し、各自の思い描く将来の夢について考える時間を設けた。

WOOPとは、メンタルコントラastingと実行意図図という心理学的知見に基づく、願いを達成するために

表4 滞日外国人児童へのキャリア支援のプログラム(内容)

1. イントロダクション(趣旨説明/担当者の紹介)
2. 「ふくしのお仕事(ソーシャルワーカーの役割)、将来の仕事について考えてみよう」(スライド資料にそって説明)
福祉/福祉の仕事/ソーシャルワーカー/社会福祉士・精神保健福祉士/社会福祉士・精神保健福祉士の活動領域/社会福祉士・精神保健福祉士の具体的な活動場面/自分の進路や、将来の方向性について考えてみよう/WOOPの書き方
3. WOOPシートの記入

WOOP「夢をかなえる実行計画」お名前()	
W(Wish 願い)	
O(Outcome 最高の結果)	
O(Obstacle 障害)	
P(Plan 「もし〜なら」計画)	もし _____ なら、 _____ 。 <small>(障害:いつどこで) (行動:障害を克服する)</small>
感想・質問・ご意見:	

図1 キャリア支援プログラムにおいて配布したWOOPシート

自分の行動を調整するためのツールである¹⁶⁾。WOOPに基づいた教育実践とその効果検証に関する知見として、竹橋らの報告がある¹⁷⁾。WはWish(願い)、OはOutcome(結果)、OはObstacle(障害)、PはPlan(計画)を意味する。まずWish(願い)を記入してもらい、願いを達成することから想像できる最善のこと=Outcome(結果)を思い浮かべ、願いを叶える上でのObstacle(障害)を見つけ、その障害を克服・回避するためのPlan(計画)を「もし〜なら」の形で考えるというものである。

WOOPの対象年齢は児童から成人と幅広い年齢層で活用可能なツールであるが、子どもにとっても効果があり、夢に向かって進み始め、社会で生きていくのに必要な基本的な振る舞いが身につくとされる。今回は「夢に向かって進み始める」点に注目してWOOPを活用することとした。自分自身で将来を考え、それを言語化することを通して、将来に向かって進むきっかけを提供することを目的とした。

(2) 結果および考察

福祉の仕事の説明は、できるだけ平易な言葉や図を多く用いて参加した児童らにも理解できるよう努めたが、参加児童の年齢からすると(多くが小学生)理解しイメージしづらい部分もあったと思われる、内容の再検討が必要であると感じた。提出のあったWOOPシート(感想記載欄含む)は20名分(24名中)であった。「福祉について勉強になった(初めて聞いたけどわかった)」「よく聞けた」「楽しかった」等が10件、「むずかしかった」「わからなかった」等が5件、「少しわかった」等が3件であった。また、「将来の夢」に関しては、各自の夢(デザイナー、学者、サッカー選手、通訳ほか)が自由な発想で記入されていた。友だちと相談したり、筆者らに記入の仕方を尋ねたりと、楽しみながらそれぞれの「夢」を記入する様子がみられた。しかし、中には「なぜ福祉の仕事の話がいきなり始まったのか」という感想もあり、今後このようなプログラムでは、冒頭に目的についてより丁寧に説明する必要がある。しかし、理解の難しさはあったにせよ、話をきく姿勢は良好であった。これには次のようなことが理由として考えられる。先に述べたように、今回のプログラムはインタビュー調査に協力し、キャリア支援の必要性を訴えたA氏が代表を務める団体で実施した。プログラム開始にあたり、A氏があらかじめ児童にしっかりと話をきくよう促していたためであろう。話をきくことは学習の基本であり、「きこう」という姿勢を保持できることは重要である。児童の将来を考え、学習に臨む基本姿勢の重要性を

認識し、きちんと伝えていける支援者の存在は大きい。

WOOP シートの記入については、時間の関係でゆっくり考えてもらうことはできなかったが、筆者らに質問をしたり、周りの仲間とも話をしたりしながら、楽しんで取り組んでいる児童が多いように見受けた。記入された「願い」も多様であった。一方で、中学生は概ね記入が進まず、用紙の提出がなかった児童もあった。このため年齢や学年による差異を考慮した内容を検討する必要がある。

今回のプログラムは筆者らにとって初めての取り組みであり、課題も散見されたが、自分の将来を具体的に考えるきっかけを提供するために WOOP を活用することが、キャリア支援において有効であることが示唆された。

Ⅲ 考 察

滞日外国人支援者へのインタビューにおいて、滞日外国人児童へのキャリア支援の必要性が語られた。表 1 にあるように、日本で生活する外国人児童への教育は日本語指導が重視されていたが、日本語力を高めるだけでは不十分であることが示された。

日本の学校におけるキャリア教育のプログラムの枠組みの例として、文部科学省『中学校キャリア教育の手引き』では、表 5 のような内容が示されている¹⁸⁾。ここに示された枠組みは一つの例として、各学校で子どもたちの実態に応じて設定することが望ましいとされているが、一定の普遍性をもつものとして開発されていることから、キャリア教育を考える上での一つの基準と捉えられるだろう。

表 5 に示された内容から、キャリア教育は、さまざまな情報を活用しながら自身の将来を考え、夢の実現に向けて主体的に行動していく力を身につけることが目的といえる。また、「自分のよいところ」「自分の長所」「自分らしさ」「自己の個性や興味・関心」という言葉で表されているような、他者とのかかわりを通して自己理解や自己肯定感を深めたり高めたりしていくことが求められるといえる。

滞日外国人児童の中には日本語力が不十分な状態で学習に臨んでいる者が多く、表 5 のようなキャリア教育を展開するためにも、まずは日本語力を高める取り組みが重視されていることがうかがえる。

しかし、キャリア教育とは発達段階に応じた課題が設定され取り組まれるものであり、「すべての教育活動を通して展開するもの」¹⁹⁾であるならば、どちらが先かと順位をつけて行われるのではなく、一体的に取り組まれるべきであろう。

そして、キャリア教育や日本語教育に加え、母語教育も合わせて取り組む必要があることを指摘したい。母語教育については、支援者のインタビューでもアイデンティティの形成という観点からその必要性が語られていた。すなわち、小学校における母語の保持と伸長を図る日本語指導の事例を紹介し、母語および母文化を尊重することはアイデンティティの形成に好影響を与えるとされており、母語教育の保持の重要性を示唆している²⁰⁾。西村は、中国語の母語教育をカリキュラム内で取り組んでいる小学校の事例を検証し、母語教育がアイデンティティ形成を促進させるという意味において重要な役割を果たし、さらに外国にルーツを持つ子どもの学習機会の保障や教師やクラスの友だちなど学校全体の共通理解につながるとしている²¹⁾。落合は公立小学校におけるベトナム語母語教室の参与観察を通して、ベトナム系児童がベトナム語学習への動機だけでなく、ベトナム文化を伝えるリソースの一つである親への信頼や親との絆を求める動機も高まり、自己の肯定やアイデンティティの確立につながる可能性を示唆している²²⁾。アイデンティティと異文化接触・言語との関連性については、丸井が今後ますます重要なテーマになっていくと示唆している。その理由として、人々が置かれている状況が複雑化していく社会において、自分が用いる言語、他者が用いる言語をどう捉えるのかについて考えることが自分自身、あるいは他者との関係について知る一つの答えになり得るからであるとされている²³⁾。さらに、真嶋らによると、母語と日本語の二言語に育つことによるアイデンティティの発達は、母語に対する肯定感を育み、それが自己肯定感へと発展し、最終的に日本語力の強化と教科学習に寄与するとされている²⁴⁾。

以上の先行研究で示されているように、母語教育が単に母語を活用する力の習得にとどまらず、教育現場や他者への影響があることや、アイデンティティの形成に重要であることがわかる。また、母語教育を通じたアイデンティティの形成が自己肯定感につながるの知見もみられる。このことから、表 5 の小学校および中学校におけるキャリア教育のプログラムの枠組み(例)にみられる自己肯定感を高める取り組みとして、つまりキャリア教育の一環として母語教育を捉える視点が提示できると考えられる。

また、教育を受けるためには、学びの場が必要である。学びの場として、日本の学校、外国人学校がある。ただし、外国人にとって義務教育は「義務」ではないため、ついていけない場合や何か問題が生じると日本の学校をやめてしまうこともある。まずは、現在実態が不明である外国人児童の不就学について、実態を把握するこ

表5 小学校および中学校におけるキャリア教育のプログラムの枠組み（例）

		小学校			中学校	
		低学年	中学年	高学年		
職業的（進路）発達段階		進路の探索・選択にかかわる基盤形成の時期			現実的探索と暫定的選択の時期	
○職業的（進路）発達課題（小～高等学校段階） 各発達段階において達成しておくべき課題を、進路・職業の選択能力及び将来の職業人として必要な資質の形成という側面から捉えたもの。		<ul style="list-style-type: none"> ・自己及び他者への積極的関心の形成・発展 ・身のまわりの仕事や環境への関心・意欲の向上 ・夢や希望、憧れる自己イメージの獲得 ・勤労を重んじ目標に向かって努力する態度の形成 			<ul style="list-style-type: none"> ・暫定的自己理解と自己有用感の獲得 ・興味・関心等に基づく職業観・勤労観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索 	
職業的（進路）発達にかかわる諸能力		職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度				
領域	領域説明	能力説明				
人間関係形成能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	【自他の理解能力】 自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 ・友達と仲良く遊び、助け合う。 ・お世話になった人などに感謝し親切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のよいところを見つける。 ・友達のよいところを認め、励まし合う。 ・自分の生活を支えている人に感謝する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の長所や欠点に気づき、自分らしさを發揮する。 ・話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 ・自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。 ・自分の悩みを話せる人を持つ。
		【コミュニケーション能力】 多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・あいさつや返事をする。 ・「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。 ・自分の考えをみんなの前で話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見や気持ちをわかりやすく表現する。 ・友達の気持ちや考えを理解しようとする。 ・友達と協力して、学習や活動に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとする。 ・異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 ・人間関係を大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 ・リーダーとフォロワーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。 ・新しい環境や人間関係に適応する。
情報活用能力	学ぶこと・働くことの意義や役割及びその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や行き方の選択に生かす。	【情報収集・探索能力】 進路や職業等に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や行き方を考えていく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・身近で働く人々の様子が分かり、興味・関心を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな職業や生き方があることが分かる。 ・分からないことを、図書館などで調べたり、質問したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な産業・職業の様子やその変化が分かる。 ・自分に必要な情報を探索する。 ・気付いたこと、分かったことや個人・グループでまとめたことを発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・産業・経済等の変化に伴う職業や仕事の変化のあらましを理解する。 ・上級学校・学科等の種類や特徴及び職業に求められる資格や学習歴の概略が分かる。 ・生き方や進路に関する情報を、様々なメディアを通して調査・整理し活用する。 ・必要に応じ、獲得した情報に創意工夫を加え、提示、発表、発信する。
		【職業理解能力】 様々な体験等を通して、学校で学ぶことと社会・職業生活との関連や、今しなければならぬことなどを理解していく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・係や当番の活動に取り組む、それらの大切さが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・係や当番活動に積極的にかかわる。 ・働くことの楽しさが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・施設・職場見学等を通して、働くことの大切さや苦勞が分かる。 ・学んだり体験したりしたこと、生活や職業との関連を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の職業生活との関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解する。 ・体験等を通して、勤勞の意義や働く人々の様々な思いが分かる。 ・係・委員会活動や職場体験等で得たことを、以後の学習や選択に生かす。
将来設計能力	夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する。	【役割把握・認識能力】 生活・仕事上の多様な役割や意義及びその関連等を理解し、自己の果たすべき役割等についての認識を深めていく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・家の手伝いや割り当てられた仕事・役割の必要性が分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・互いの役割や役割分担の必要性が分かる。 ・日常生活や学習と将来の生き方との関係に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会生活にはいろいろな役割があることやその大切さが分かる。 ・仕事における役割の関連性や変化に気付く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等が分かる。 ・日常生活や学習と将来の生き方との関係を理解する。 ・様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える。
		【計画実行能力】 目標とすべき将来の生き方や進路を考え、それを実現するための進路計画を立て、実際の選択行動等で実行していく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・作業の準備や片づけをする。 ・決められた時間やきまりを守ろうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の夢や希望を持つ。 ・計画づくりの必要性に気づき、作業の手順が分かる。 ・学習等の計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来のことを考える大切さが分かる。 ・憧れとする職業を持ち、今、しなければならぬことを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・将来の夢や職業を思い描き、自分にふさわしい職業や仕事への関心・意欲を高める。 ・進路計画を立てる意義や方法を理解し、自分の目指すべき将来を暫定的に計画する。 ・将来の進路希望に基づいて当面の目標を立て、その達成に向けて努力する。
意思決定能力	自らの意思と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する。	【選択能力】 様々な選択肢について比較検討したり、葛藤を克服したりして、主体的に判断し、自らにふさわしい選択・決定を行っていく能力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きなもの、大切なものを持つ。 ・学校でしてよいこと悪いことがあることが分かる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 ・してはいけないことが分かり、自制する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶ。 ・教師や保護者に自分の悩みや葛藤を話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の個性や興味・関心等に基づいて、よりよい選択をしようとする。 ・選択の意味や判断・決定の過程、結果には責任が伴うことなどを理解する。 ・教師や保護者と相談しながら、当面の進路を選択し、その結果を受け入れる。
		【課題解決能力】 意思決定に伴う責任を受け入れ、選択結果に適應するとともに、希望する進路の実現に向け、自らの課題を設定してその解決に取り組む能力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のことは自分で行うとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の仕事に対して責任を感じ、最後までやり通そうとする。 ・自分の力で課題を解決しようと努力する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活や学習上の課題を見つけ、自分の力で解決しようとする。 ・将来の夢や希望を持ち、実現を目指して努力しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習や進路選択の過程を振り返り、次の選択場面に生かす。 ・よりよい生活や学習、進路や生き方等を目指して自ら課題を見出していくことの大切さを理解する。 ・課題に積極的に取り組み、主体的に解決していくこととする。

国立教育政策研究所「児童生徒の職業観・勤勞観を育む教育の推進について」（平成14年11月）より、小学校および中学校に該当する内容を抜粋

とが必要であろう。また、現在多くの外国人学校は各種学校・学校法人として認可されていないことから、外国人学校へ通学しても、義務教育を終えたことにはならないのが現状であり、これらの制度保障が必要である。

そして、学校に通うためには生活の安定が基盤となる。保護者の不安定な就労形態による厳しい経済事情等により、学校に通えない児童の存在が指摘されている^{25, 26)}。

滞日外国人児童への支援については、学力支援や日本語支援といった可視化する問題への対応のみにとどまらず、これらの問題解決の延長上にある「日本で生活するための支援」という視点で、家族の問題も含め解決を図っていく必要がある。そして、彼らを受け入れる側としても、彼らのもつ多様なルーツ、アイデンティティを尊重し、自らの考えも共に変化させていくための支援体制が今後ますます重要となってくる。

おわりに

本研究を通して、滞日外国人児童の抱えるさまざまな課題が見出された一方で、児童の将来を見据え、キャリア支援の必要性を認識している支援者の存在も明らかになった。これまで筆者が取り組んできた研究を含め、滞日外国人が抱える課題の多様性に圧倒されそうになりながら、しかし、共に取り組んでいこうと志を同じくする存在は心強い。本研究を踏まえて、滞日外国人児童が置かれている状況をさらに検証し、滞日外国人児童にとって、将来にさまざまな選択肢が開かれ、自分たちの役割に価値を見出し活躍できる社会の構築を目指したい。

付記

本研究は平成 27～29 年度日本学術振興会学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））（課題番号 15 K 03997）「ニューカマーの障がい者のための生活支援システムの構築－滞日ブラジル人の調査から－」（研究代表者：寶田玲子、研究分担者：木村志保、柿木志津江）の助成を受けて行っています。

なお、本研究にあたり、調査にご協力くださった滞日外国人支援者の皆様および調査対象者の皆様に心より感謝申し上げます。

注および引用文献

- 1) 法務省 (2017) 「平成 28 年末現在における在留外国人数について（確定値）」 (<http://www.moj.go.jp/content/001220573.pdf> 2017. 8. 28)
- 2) 法務省 (2015) 「第 5 次出入国管理基本計画」 (<http://www.moj.go.jp/content/001158418.pdf> 2017. 8. 28)
- 3) 木村志保・寶田玲子・柿木志津江 (2017) 「滞日外国人が抱える生活課題とニーズ分析の試み－滞日外国人支援団体・機関を対象としたアンケート調査より」『総合福祉科学研究』8、7-15 を参照。
- 4) 鈴木久美子 (2006) 「多文化コミュニティにおける保育・教育施設の課題と可能性－ブラジル人集住地域・菊川市を事例として－」『常葉学園短期大学紀要』37、77-94
- 5) 堀田正央・松永幸子・森本昭宏 (2012) 「日本語を母語としない保護者を持つ子どもの認可外保育施設利用に関する研究－保育者の意識を中心に－」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』12、113-123
- 6) 二井紀美子・緩利誠 (2013) 「外国人児童生徒支援に資するアセスメントの枠組の提案－不就学児調査を通して－」『生涯学習・キャリア教育研究』9、1-12
- 7) 奴夫妻駿介 (2014) 「日本における外国人児童生徒「不就学」の実態調査－都道府県教育委員会への質問調査より－」『多文化関係学』11、87-98
- 8) 武小燕 (2015) 「愛知県における多文化共生の現状と課題－外国人住民の現状と子どもの教育の課題を中心に－」『名古屋経営短期大学紀要』56、35-45
- 9) 中川祐治・足立祐子・内海由美子・ほか (2015) 「外国人散在地域における「特別の教育課程」による日本語指

導」『福島大学地域創造』26(2)、49-61

- 10) 吉田洋子・高橋智 (2006) 「障害・特別ニーズを有する在日外国人児童生徒の教育実態－外国人学校への質問紙調査を中心に－」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』57、269-289
- 11) 高橋智・中村美希 (2010) 「障害を有する外国人児童生徒の教育貧困の実態－本人・保護者及び学級担任への面接法調査から－」『障害者問題研究』37(4)、60-65
- 12) 田巻松雄 (2012) 「外国人生徒の高校進学問題－入試配慮に焦点を当てて－」『理論と動態』5、79-93
- 13) 高谷幸・大曲由起子・樋口直人・ほか (2015) 「2010 年国勢調査にみる外国人の教育－外国人青少年の家庭背景・進学・結婚－」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』39、37-56
- 14) 文部科学省「帰国・外国人児童生徒教育等に関する施策概要」 (http://www.mext.go.jp/a_menu/shoutou/clarinet/003/001.htm 2017. 8. 28)
- 15) 文部科学省 (2017) 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 28 年度）」の結果について (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/_icsFiles/afieldfile/2017/06/21/1386753.pdf 2017. 8. 28)

なお、この調査で「日本語指導が必要な児童生徒」とは、「日本語で日常会話が十分にできない児童生徒」「日常会話ができても、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じており、日本語指導が必要な児童生徒」を指す。この定義に該当する児童生徒には日本国籍の者も含まれるが、帰国児童生徒、日本国籍を含む重国籍の場合、保護者の国際結婚により家庭内言語が日本語以外の場合等が考えられるとされている。そのため日本語指導に限らず、生活する上での支援を必要とする児童も多様であると考えられる。滞日外国人支援を考える際には、このような人々の存在も視野に入れておかなければならない。

- 16) Oettingen, G. (2014) *Rethinking Positive Thinking: Inside the New Science of Motivation*, Penguin Random House (= 2015、大田直子訳『成功するにはポジティブ思考を捨てなさい－願望を実行計画に変える WOOP の法則－』講談社)
- 17) 竹橋洋毅・豊沢純子 (2016) 「中学生の夏休みの宿題遂行を支える教育介入方法の検討－WOOP (Wish-Outcome-Obstacle-Plan) の有効性の検討－」『関西福祉科学大学紀要』20、49-59
- 18) 文部科学省 (2011) 『中学校キャリア教育の手引き』教育出版、17-18
- 19) 18) に同じ、131
- 20) 于涛 (2008) 「Y 市における外国人児童生徒に対する教育支援体制に関する考察－同化教育からの脱却に注目して－」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2(1)、91-102
- 21) 西村佑理 (2009) 「外国にルーツをもつ子どものアイデンティティ形成に寄与する母語教育－公立小学校における取り組みを中心とした実証的研究－」『教育学論集』35、19-31
- 22) 落合知子 (2012) 「公立小学校における母語教室の存在意義に関する研究」『多言語多文化－実践と研究』4、100-

120

- 23) 丸井ふみ子 (2012) 「アイデンティティ研究の動向－異文化理解・言語との関係を中心に－」『東京外国語大学大学院言語・地域文化研究』18、193-209
- 24) 真嶋潤子・桜井千穂・孫成志 (2013) 「日本で育つ CLD 児における二言語とアイデンティティの発達－中国語母語話者児童 K 児の縦断研究より－」『日本語・日本文化研究』23、16-37
- 25) 松垣洋平・石坂広樹 (2015) 「ニューカマー児童生徒への教育支援の現状と課題－岐阜県における取り組みを手掛かりに－」『鳴門教育大学国際教育協力研究』9、1-9
- 26) 文部科学省 (2016) 「学校における外国人児童生徒等に対する教育支援の充実方策について (報告)」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/06/__icsFiles/afieldfile/2016/06/28/1373387_02.pdf 2017. 8. 28)